をなしてゐるので先天的にその傾があるとは考へられぬ。次ぎに躰格を强壯にすることでこれは學力を增進することゝ相並んで最も必要な條件である。一躰獨乙あたりの小中學の教員が教室に於ける努力は實に目さましいものである。小學教員は毎週二十七八時間から三十時間を受け持ち、中學程度に於ては毎週十七八時間から二十三四時間を受持つやうになつて居るが、その毎時間教授上の努力は素晴らしいものである。汗を拭きながら發音の練習をやつてるのも度々見受けた。教授法の秘訣は教師まづ活動し更に大に兒童を活動せしめるにあるのである。しかし大に活動するには勢ひ躰格が强壯でなければならん。西洋の婦人を見るとその强壯の點において敢て男子に一歩を讓らんので日本とは甚しい相違である。西洋の婦人は隨分活潑であらゆる運動を試みてゐるし、夏季は輕裝して高山に登るといふやうにすべてが男子と同じやうに進んでゐるであるから、教員としても敢て男子に劣らない。西洋では所勞のため講義を休むといふことは滅多にない。これは義務の觀念が發達してゐるためでもあるが、又体格が强壯であるとこが確に有力な原因である。故に婦人にして將來社會上は勿論教育上及び學術上大に發展せんとすれば、まづ學力を充實にし人格を陶冶すると同時に大に体格を强壯にしなければならぬといふ結論に到着するのである（完）

◉中世の心に就て

文科一部二年　荻野、山中、阿部、木村、日比野

私は中世の心に就て御話を致します。何故かゝる問題を研究する樣になつたかと申しますと、僭越かも知れませんが、今西洋の學者の一部に於て現代思潮の一側面として剛健、質朴、簡單等の純一なる思想の要求がおざいまして、これに附隨して中世の精神の文化史的研究を生じて居る事を此の頃耳にするのでございます。我が國に於ても現代の思潮の一部に、簡單、純一、整理と云ふやうな所謂中世的精神の要求が起つて居るかとも見られるのでございます。然るに歐州中世の精神、即ちチユートン、ケルト等の民族の精神はよく我が鎌倉武士の心と似て居ります。それで私は鎌倉武士の精神を研究して中世の心を味ひたいと思ふのでございます。之れを研究するにつきましては主として精神を研究を目的といたしました爲めに、史實ばかりではなく純粹に文學的の材料をも多く基礎と致しました。それは史料としては價値を疑はれる文學的作物が、意外に國民の血管に生ける精神となつて流れて居るからでございます。

中世期の精神の特色はいろ〳〵ございますが主なるものは剛健、熱烈、節操、質朴と云ふやうな例をあげて申します。

先づ剛健について申しますが、かの卑怯の名を以て世に知られて居る平維盛が賴朝追討のために

富士川に向ひました時、東國の案内者であつた武藏の國の住人齋藤別當實盛に、「關東八箇國には汝程の剛勇の武士何程あるか」と尋ねましたのに答へて次のやうに申しました。

「君は實盛を大箭と思召され候にこそ。僅か十三束をこそ仕り候へ。實盛ほど射候ふ者は八箇國にはいくらも候。大箭と申すぢやうの者の十五束に劣つて引は候はず。弓の弦も健なる者の五六人して張り候。箇樣精兵どもが射候へば鎧の二三領は容易にかけず射通候。大名と申すちやうの者の五百騎に劣りて持つは候はず。馬に乘つて落つる道を知らず惡所を馳すれど馬を倒さず軍はまた親も討れよ子も討たれよ死ぬれば乘り越え乘り越え戰ふ候。西國の軍と申すは其儀候はず親討たれぬれば引き退き佛事孝養し忌明けて寄せ、子討たれぬればその愁嘆とて寄せ候はず、兵粮米つきぬれば春は田作り秋苅り收めて寄せ、夏は暑しと厭ひ冬は寒しと嫌ひ候。東國の軍と申すは凡て其儀候はず云々。」

これは平家物語に出て居る一節でございますが、之を以ても當時の鎌倉武士が如何に剛勇であつたかが偲ばれるではございませんか。

次に熱烈と云ふ事でございますが、之れは最も信仰の方面によく表はれて居ります。從つて此處に上げます人物は、蓮生坊（熊谷直實の法名）及び文覺上人といふ世捨人の事でおざいます。で熊谷直實の出家の動機につきまては種々の說がありますが、之は此所で論ずべき事ではございませんが、或る日後生菩提の事を尋ねるために法然上人を訪れました。當時上人は最も平易で最も簡單な融通念佛宗を以て世を濟度しようとして居りましたので、蓮生坊にもその主意をもつて「たゞ念佛さへすれば罪障消滅して往生更に疑ひなし」と說ききかせました。處が蓮生坊は膝をたゝいてよろこぶだらうとの豫期に反してさめざめと泣き出しましたので、上人は不思議に堪へやらずその故を問ひましたら彼は「手足ももぎられ命をも捨てるほどの苦痛を忍んでこそ後生は安穩だらうと思つて居りましたのに、念佛さへすれば疑ひなく往生せられるとの有りがたい御言葉に思はず涙をこぼしました」と答へました。此の時から彼は二心なき淨土の信者となつたのでございます。其後の信仰は非常に熱烈で始終念佛ばかりして居りました。建久三年と同じき六年とに賴朝が關東から上洛した時でも敢て訪問することもなく專念業を行ひました。又常に「行往坐臥不背西方」と云ふ文を深く信じてかりそめにも西を背にする事はなく、曾て關東に下る時にもそれは東に向いて行くのでございますから、佛の在ます西に背を向ける事を憚つてに馬に後向きに乘つて行きました。そして「淨土にも剛の者とや沙汰すらん西に向ひて背を見せねば」と詠じて笑つたと申します。

又文覺上人は渡邊遠藤左近少監茂遠の子で遠藤武者盛遠と云つて上西門院の衆でございました。ふとした事から世の無常を感じて佛道に志しましたが、固より當代の武士のことゝて熱情的の信仰

をもつて居りました。で、その信仰のために行ふ修業は極めて非凡なものでございました。或時は眞夏の太陽がカン〳〵と照り渡つて草も木も靜まりかへり木蔭に居てさへ堪へがたいやうな日に、たゞ一人片山里の藪の中に分け入りまして着物をぬぎすてゝその中に身を横へました。こんな所を自分の天地として居る虻、蚊、蟻、蜂等の毒虫は、ヒシ〳〵と身に取りついて勝手に刺したり食つたり致しました。普通の人ならばとても十分間と堪へられまいと思ひますが、上人は修業のためにはかゝる苦痛も決して避けようとは致しません。痛さと暑さとの堪へ難い間に七日間は身動きもせず其等の敵の攻撃を甘んじて受けました。又或時は霰たばしる師走の寒さを事ともせず、身を切る様な冷い水が滔々として落ちる那智の瀧つぼに打たれに行きました。法衣を脱ぎ捨てゝ氷の様な瀧壺に頸際まで漬した時にはどんな堪へ難かつたでありませう。こんなにして一日を暮し二日を過して居りましたが五日程にもなつた頃上人の志は決して屈する事はありませんが肉躰はどうしてかゝる狀態を永續する事が出來ませう。幾度か知覺を失つて下流に押し流されたので御座います。上人の精神をこめた此の修業は果して天に通じましたか死の狀態に陷つた時にはいつも美しい天童のために助けられました。それで上人は勇氣百倍して再三再四瀧壺に歸つて同じ事をくりかへました。さうして遂には冷い冬の水が湯の樣になつてたやすく定めた日數の修業を遂げる事が出來ました。今申しました樣にその信仰が實行的でしかも熱烈であつたのは、今から考へますと寧ろ滑稽に思はれる程でございます。

それから節操に就いて申しますと、彼の伊豆の小島に流されて、廿余年の間片田舍に蟄居して居た兵衛佐源頼朝が、以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ源氏の再興を圖りました。それで諸國の武士は我先きにと其の麾下に集つた時に。畠山重忠の父は、其の弟と共に京都に居たので御座います。當時僅か十七歳であつた重忠が、獨り淋しく其館を守つて居りましたが、彼は心中に源氏は四代の重恩を受けて居るが、一旦平家に屬した以上は義として平家の爲に、戰はねばならぬ。まして父も叔父も京都に居るのだからう……」と思ひましたので斷然志を決して、五百騎ばかりの手兵を率ゐて平家の爲に戰ひました。其の時外祖父三浦義明は、重忠の敵として討死致しました。古語に所謂「大義親を滅す」とは彼の心を申すので御座いませうか。

これも同じ時の事でございますが、齋藤別當實盛は、戰勝旗は必ず頼朝の手に歸するといふことを豫め見拔いて居りましたが、嘗て平家から恩を受けて居りましたので、節議を重んじて源氏には附かず七十余歳の老体を持ちながら白髮を染め奮然起つて軍に從ひ壯者と其の勇を競ひ勇ましく且つ花々しい最後を遂げました。これらの献身的の節操は實に中世的精神のシンボルの一つと存します。

最後に質朴にといふ事でございますが、是は當時一般に此の氣風を有して居りまして、普通とな

つて居りましたから殊更に取り立てゝ申す樣な例も御座いません。で茲には、省いて置きます。

以上大体申しました通り、中世の心の代表者である鎌倉武士の特色は、要するに剛健熱烈節操質朴等にあるので御座います。

何故にかやうな心的傾向を有する樣になつたかと申しますと、當時武士が住居を占めて居た關東の地は、蝦夷と境を接し常にこれと交戰致して居りました。又一方には鎭西の邊境を守るために、防人となつて幾多の辛酸をなめ、これらに依て十分鍛練した結果、固より剛健であつた氣象は、より以上確實な發達を遂げました。そればかりでなく其他種々の方法によつて訓練いたして居りました。其の重なるものは、禪宗と宋の哲學とが支那から傳つて來た事で御座います。禪宗には、二派ございまして、一つを臨濟宗といひ、榮西によつてひろめられ、一つは曹洞宗と申しまして、道元によつて傳へられました。其の特色は、自力を重んじ、意志の練磨を必要とし、淡白質素を旨と致しました。此の宗におきましては、自ら心が鎭まる樣な物靜かな山の中に質朴な庵を結びまして、たゞ座禪三昧に日を送り、瞑想に耽つて專ら自力によつて悟道を得、生死の境を超越せむ事をつとめて居りました。此の特色は、偶然にも武士が訓練上理想とする所に一致いたしましたので、武士は其の訓練の方便として、これを研究し且つ其の力を借りました。茲に至つて武士の心は更に練られて、精神上に是を興へられました。其の上猶武士の心を完全に練りあげたものは、宋の哲學即ち朱子

の學問で御座いました。朱子學は性命理氣の說を唱へ、深遠な哲理を研究するものでございまして、武士は之れをも知らず識らずの間に、自己のものと致しました。それで禪宗によつてよりよく練られた心は又一段の深み厚みを生じまして、健全なる武士の心……いひかへますれば中世の心……は大成せられました。此の中世の心は新しい宗敎政治法制文物等を產みました。

前時代におきましては、朝廷にあつて政治を取り天下の中樞とならなければならなかつた公卿が、其の職分をも顧みず、今日私共が當時の書物によつて、美しい繪卷物として、これを胸に描き、いかにそれが優美で華かであつたかを、容易に想像する事が出來る位雅かな遊びにばかり耽つて居りました。上に立つ者が此の有樣で御座いましたから、下々の者も亦實務を忘れて遊藝を嗜み斯して世の風俗は一般に優柔不斷となりました。かゝる時保元平治の大亂が起り、又少し後れては、これまで其の一門に勢力を集め、朝日の上る樣な有樣であつた平氏が、其の全く軟化して公卿の風を眞似終せた時、忽ち時勢の變化すべき氣運が向つて來て、榮華の夢のまだ醒めぬ內に、西海に沈まなければならなくなりました。かく世の中が動搖して居たにも拘はらず、天災地變は屢々起るのでございました。それで當時の人には、しみじみ人生の賴み難い事を感じ其の心は不安に滿ちてよる所もございませんでした。せめて宗敎の力に依つて、精神の慰安を求めようと致しました。それならば、當時の宗敎は如何であつたかと申しますと、非常に形式的皮相的である上に、貴族的で、しか

も墮落して居りましたから、到底一般人に滿足を與へる事は出來ませんでした。かく人心の唯一の慰安たるべき宗敎が、此の有樣でございましたので、人々は自らの心を慰めるに足る新しい宗敎の起らむことを切望致して居りました。かゝる時、時勢は變化して、これまで優惰な公卿の手に握られて居た政權は、鍛へられたる勤儉尙武の氣風を備へた、鎌倉武士の手に移りました。これに伴つて宗敎も改革せられ、其の面目を新たに致しました。即ち新宗敎は大いに時勢の要求に適し、簡單に平民的に又誰にでも信ずる事の出來るものでございましたから、廣く下層社會までに及びました。それには二三の宗派がございまして、淨土宗日連宗等は即ちこれでございます。元來淨土宗は前時代の末に開かれたもので、來世住生を勸說し、「現世は假の世である。現世の名譽幸福は、永久的のものではない。なほ現世以上に未來があつて、其の未來とは死後である。此の未來の利益幸福こそは求むべきものである。」と、說くのでございまして、いはゞ來世佛敎ともいふべきものでございます。これを初めて唱へた人は、法然上人のやうに普通申して居りますが、實は其の以前に空也上人が、淨土往生を說いて居ります。即ち始めて唱へたのは空也上人で、これを完成したのは法然上人でございます。新時代に入りましてからは、尙これから眞宗だの、時宗だのを生じました。この眞宗時宗の開祖は皆法然上人の弟子でございまして、一層時勢の要求に適したものでございました。日蓮宗は申すまでもなく、日蓮上人によつて開かれ、其の主張は所謂、「立世安國」でございます。でこれは、來世佛敎の弊害を觀破し、四個の格言…念佛無間。禪天魔。眞言亡國。律國賊。…を唱へ、常に奮鬪的の態度を取つて、他の宗派に反對して、自己の宗派の傳播に努力致しました。これ等の諸宗は、當時の疲れた人心を復活せしめる爲に、非常な熱情を以て、其の敎化に盡力致しましたから、一般人の信仰も强く、安んじて其の身も心も、おのが信ずる所に投げ掛けて、喜んで其の支配を受ける樣になりました。で其の感化影響は廣く深く染みこみました。これを一言で申しますならば、「シツクリシンミリ」といふ言葉で盡せると存じます。政治は至つて簡單で、僅か政所文註所侍所の三つの役所に盡き、法令も唯これまでの、武士の仕來りを集めて拵へた、貞永式目だけでございましたが、しかも是等は有力で、前代に比を見ない程、世の中は秩序立つて善く治まりました。これは前代の公卿政治が百官百省を設け、律令格式等の制定をして、大層煩はしくこみいつて居たのに對し、大いに其の趣きを異に致しました。文物は一体に衰へましたけれども、それは或る意味に於て衰へたので、自ら新しい現象を開きました。即ち前時代の樣に、見るも眩しいやうな華かさは、此の時代には見度いといつても見られませんが、其の特徵は雄壯剛健で、至つて地味でございました。是等の政治に支配せられ、これらの文物を見て居た當時の人の日常生活は、單純で衣食住すべての點に、淡白質素の氣分が見えてまゐりました。以上は中世の心の表はれてございまして、是等の事に依つて中世の心は、大体味はれると存じます。

斯る精神を武士道と申しまして、我が國精神界の一大潮流となつて居ります。後屢々變化して現代となり、現時に於きましては、科學の發達により社會の進歩により、精神生活も物質生活も、共に複雜を極めて居ります。それ故現今に於ては、又々簡易生活の叫び、簡明なる信仰の要求といふ樣は聲が起つて居るかの樣に見受けられます。我が國に於きましても、かういふ精神を研究し、又實際生活に適應せしめようとする考が、起つて居るのではないかと存じます。けれどもそれは、「複雜な精神を徹した簡單」「洗練した單純」を求めるのではございますまいか。一歩進めて申しますならば、複雜な注意や精到なる思想の上に立つて、これを統一し簡明にし、且つ活力の附け加はつた思想を、要求するのではなからうかと存じます。今日まで進歩した文化に反對して、消極的に質素簡單平易なれといふのではないと存じます。若しそうならば國運の發達上、厭ふべき思想だと存じます。併し現今の樣に、重複した精神生活物質生活に惱まされるのは、國民の活力を殺ぐことが尠くないと存じます。かかる意味に於て、華麗な羅馬や平安朝文明の後に起つた、チユートン、ケルト等の原始的氣力を味ひ、鎌倉武士を描いた鎌倉時代の文學を味つて、中世的精神を顧るのは、又多少の興味ある事と存じます。時代思潮の側面に、中世的精神を渇好する一支流のことを申し上げてお敎を請ふのでございます。（完）

叢談

◉習字と作文とに就て

中川謙二郎

自分は從來普通敎育に於ける作文と習字とに就て、私見として考へて居る事がある。ここにそれ等の問題を提出して、實際敎育の任にあたつて居られる人々の意見を聞き度いと思ふ。

一、習字に就て。

イ、字體。　現今、小學校及高等女學校、中等學校に於て楷、行、或は草書に書き分けをさせて居るが果してそんな必要があるであらうか。自分はこれからの複雜な社會に處して行くのにはどれか一體で十分用が足りるのであり、其上敎へる方でも習ふ方でも非常に樂であるから普通敎育に於て習字として書く字は一體に定めた方がよくはあるまいかと考へる。

ロ、字の大さ。　字の大さに就ても現今普通敎育に於て大小種々に習はせてゐる。しかし平素普通人の書く字の大さは、大體定まつて居るのであるから、それを標準として習はせたらどうであらうか。固より書は東洋に於ては一の藝術であるから、書家としては字体も大さもいろいろに書き分ける必要があらうが、普通敎育に於てはそんな必要があるであらうか。今日普通敎育の習字に於て實用としての字と藝術としての字とが混淆せられてゐはすまいか。

二、作文に就て。

イ、口語體。　作文は追々變遷して近來非常に進歩したと思ふ。小學校や中等學校に於て次第に口語體が勢力を得るやうになつて來た。